

原記載に2以上の分類群が混合している事が分つた場合に、その中の一つが既に他の学者によつて分けられ命名されてしまつている時は、残つた方のものが原記載と矛盾しない限り Lectotype とみなされる。又その学名が現在広く使用されている慣例があれば、なるべくその慣用を変更しない様に Lectotype を選ぶべきである。

一度ある学者が Lectotype を選んだならば、その標本が原記載に矛盾しない限りは後の学者はその決定に従わなければならない。又学名の適用を論ずる様な時には Lectotype が指定された文献をも引用して正確を期することになつてゐる。

Neotype を選ぶ時には Lectotype を選ぶ時以上に慎重に考慮する事が必要であるのはいうまでもない。

1954年バリーの国際会議で決定した事項は目下編集委員会で字句が考慮されているが、タイプについては「1955年1月1日以後は、現生植物の新しい分類群の学名はその命名上のタイプが示された時にだけ正当な発表と見なされる」という重要な一項が新たに第44条に挿入される事になつた。尚「そのタイプが標本である場合にはそれが永久に保存される場所を示さなければならない」という勧告が付けられている。即ち今後新植物を記載する時には、基準標本を明示すると同時にその永久的保存場所をも示さなければならない。これは今迄基準標本を選定したり、その所在をつきとめるのに多くの分類学者が無駄な時間と労力を費したのを少しでも省こうという趣旨である。

命名上のタイプという考え方はつきりしていなかつた古い時代のものは致し方ないが、今後基準標本は公開されかつよく整理された腊葉室に大切に保管し、何時でも研究者の求めに応じて見られる様にしておくべきである。近年我国でも基準標本の保存の大切な事が認識されて、日本学術会議はこの点について政府に勧告を行い、文部省は先ずその基礎資料として、国内にある基準標本の所在調査を初めているが、古い時代のものの調査はきわめて困難である。しかしまとまつた植物群から基準標本所在リストが印刷される事になり、本年中にはシダ植物と蘚苔植物の部が出版される予定である。

---

○新 敏 夫 ヤクシマギジノヲの新産地 Toshio SHIN: A new locality of *Plagiogyria adnata* (Bl.) Bedd. var. *yakushimensis* (K. Sato) Tagawa.

ヤクシマギジノヲは佐藤肇正氏により屋久島で発見記載されて伊藤洋氏によりタカサゴギジノヲと同一種にされていたものであるが田川基二氏により、タカサゴギジノヲの変種とされたもので現在まで他の産地を聞かない。

今夏(1955年)奄美大島の湯灣岳頂上附近で採集した。生育地で観察するとタカサゴギジノヲが単にいじけて矮小になつたものではないと考える。

尙初島住彦氏は大隅半島の高山町、二股岳で採集しておられるので九州本土の南端から、屋久島、奄美大島まで分布していることになる。